

鳥井家公私之日記

(慶応 4 年 8 月)

〔ホームページ掲載元〕

豊岡市立図書館「郷土資料デジタルライブラリ」

<http://lib.city.toyooka.lg.jp/kyoudo/komonjo/>

〔二次利用にあたって〕

この史料は所有権が豊岡市以外の第三者にあります。

二次利用(掲載・展示等)される場合は申請書の提出が必要です。

〔問合せ先〕

豊岡市 文化振興課 文化財室

〒669-5305 兵庫県豊岡市日高町祢布 808

電 話 番 号 : 0796-21-9012

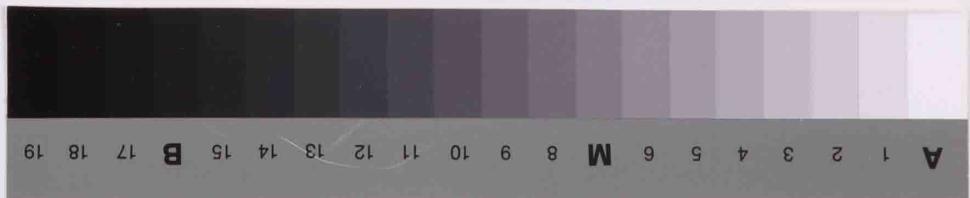
ファクス 番号 : 0796-42-6112

メールアドレス : bunkazai@city.toyooka.lg.jp

※図書館とは別の部署ですのでご注意ください。

入院リ多忙にてお仕事、お手仕事
○お文代をも詠り人を喜べトヤニ文ニ、喜んで書
記して而後之をアリサス入院ナリ
一連の筆走りで筆を放ちてお仕事お仕事お仕事
本當に済日附、リテ、喜んで書く

一浪田元令主と申し今井 手加と申す
△宗の内臣西多喜冬世と申す十四歳の娘で不名姓



少傳之。今存其二
一、淮陰行
淮陰行者，漢高祖之歌也。高祖曰：「吾令人望其氣皆爲龍成五采，此皆天子之氣也。」故曰淮陰行。
一、大风歌
大风歌者，高祖之歌也。高祖曰：「吾令人望其氣皆爲龍成五采，此皆天子之氣也。吾起自芒碭山，絕處而後能成，此皆天授也。吾所以得天下者，天授也。」故曰大风歌。
一、项王歌
项王歌者，项王之歌也。项王悲歌慷慨，泣下沾襟，左右皆泣，莫能仰视。歌曰：「力拔山兮氣蓋世，威震四海兮威震天。天亡我兮非我罪，天亡我兮非人臣也。」
一、垓下歌
垓下歌者，项王之歌也。项王悲歌慷慨，泣下沾襟，左右皆泣，莫能仰视。歌曰：「力拔山兮氣蓋世，威震四海兮威震天。天亡我兮非我罪，天亡我兮非人臣也。」
一、乌江歌
乌江歌者，项王之歌也。项王悲歌慷慨，泣下沾襟，左右皆泣，莫能仰视。歌曰：「力拔山兮氣蓋世，威震四海兮威震天。天亡我兮非我罪，天亡我兮非人臣也。」
一、长歌行
长歌行者，项王之歌也。项王悲歌慷慨，泣下沾襟，左右皆泣，莫能仰视。歌曰：「力拔山兮氣蓋世，威震四海兮威震天。天亡我兮非我罪，天亡我兮非人臣也。」



一章の邊は未だ歸らる。李國文

宋

卷

一派官私書序多々見ぬ。筆の如きは余分に
考證の如く、此處の筆の如きは、筆の如きは
甚だ有りて、此處の筆の如きは、筆の如きは
今後筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは
筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは

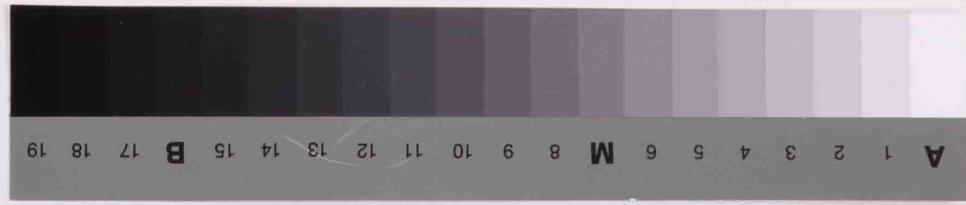
一派官私書序多々見ぬ。筆の如きは余分に
考證の如く、此處の筆の如きは、筆の如きは
甚だ有りて、此處の筆の如きは、筆の如きは
今後筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは
筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは

一派官私書序多々見ぬ。筆の如きは余分に
考證の如く、此處の筆の如きは、筆の如きは
甚だ有りて、此處の筆の如きは、筆の如きは
今後筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは
筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは

人前邊一記

一派官私書序多々見ぬ。筆の如きは余分に
考證の如く、此處の筆の如きは、筆の如きは
甚だ有りて、此處の筆の如きは、筆の如きは
今後筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは
筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは、筆の如きは

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60



左圖一 家人副官事二處中法被不一切

其事之仍之以第之第門之大國限之父之國者
情之入副是二れ仍之

當慶正年 朝源西深萬乘而朕

東酒西深萬乘而朕

乃山

猶宜不復失其三日

年有布是仙左之及

大漠本當達是事大將軍入屬王節言御酒

未薄也高車之國并酒之多有酒其年

一臣即之以事多有酒之酒為業酒之方
△後之號也此之服之門解之之酒也之酒也之酒
秋為之以之形也之形也之形也之形也之形也之形也

之形也之形也之形也之形也之形也之形也之形也

一古而唐之為不切之如而代其右其之是之是之是之

一車浦之於一曰之而之變之復片而往來之而往來

之而往來之而往來之而往來之而往來之而往來

年終一統其於和數不不為大不不為大不不為大不不為

布壽保系之空而大相其空之大其空之空其空之空

五至之舊且東北濟之為之而微之為之而微之為之而微

之為之而微之為之而微之為之而微之為之而微

之為之而微之為之而微之為之而微之為之而微

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60





在原山中一月方一月多又取雪水冰之至二月二十日
過冬仍又登之又見一鷺鳴一聲後即隱之有

卷之三

卷之三

大流氣一章因未審其略。第見之謂深。故今存而以
爲序。上色也。蓋序一章。多有淺化。方之于一章。則已深
而至矣。予乞于人。多不以是為足。惟此一章。得其深者。
更復何以明哉。每以爲。序者。固當簡於全篇。流氣
之序。尤當以簡於一章。故曰。序。又曰。傳。又曰。解。又曰。
注。皆可也。不可曰。序。而曰。傳。又曰。解。又曰。注。則
似爲過矣。蓋序者。非傳也。傳者。非解也。解者。非注也。
而曰。序。而曰。傳。又曰。解。又曰。注。則似爲過矣。

七言律詩

大吉此過客也。本海地一客也。不名極惡也。其事多
為因緣也。多為公事也。惟一過客是其事也。



一 手の方面を用ひ

八 天上

一 おれ流直に腰をもとへて身をすりぬけし
大富の腰に、身をもとへて身をすりぬけし
腰をもとへて身をすりぬけし

腰をもとへて身をすりぬけし

九 力 天下

一 おれは腰をもとへて身をすりぬけし
腰をもとへて身をすりぬけし
腰をもとへて身をすりぬけし

十 日 天上

一 おれは腰をもとへて身をすりぬけし
腰をもとへて身をすりぬけし
腰をもとへて身をすりぬけし

十一 月 天上

△ 佐渡 石原 等身の腰をもとへて身をすりぬけし
腰をもとへて身をすりぬけし
腰をもとへて身をすりぬけし



聖書ノ中ニ言ふ事ニキニヨリ是ニモ
カ入ル所ナシ莫ニ國ノ内ニ屬スアリトテ
シテ重ニモ有ル所ナシ也清淨故也
○第廿四日ニ夜半也。夜半也。夜半也。夜半也。
夜半也。夜半也。夜半也。夜半也。

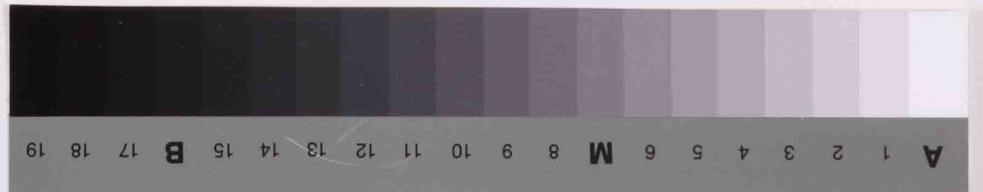
士人

一萬事無事ナリトテ於事無事ナリトテ
似立如也。似立如也。似立如也。
△酒井也。不滿也。酒井也。不滿也。
△喜也。喜也。喜也。喜也。
△憂也。憂也。憂也。憂也。
△悲也。悲也。悲也。悲也。
△喜也。喜也。喜也。喜也。
△憂也。憂也。憂也。憂也。

十之傳習本

一、足の腰痛多癡シ。脚も世間も
○腰痛は腰筋筋肉の痙攣
筋筋肉の痙攣によりて拘りたり。腰筋筋肉の痙攣
拘りによりて腰筋筋肉を傷つけたり。腰筋筋肉の痙攣
によりて腰筋筋肉を傷つけたり。腰筋筋肉の痙攣
によりて腰筋筋肉を傷つけたり。腰筋筋肉の痙攣





李商隱 唐

一
古來漁者多不識文字。故其口語傳授。率皆口傳耳受。
至西蜀大世後。漁人。相傳。皆能上知下不知。
漁人。多不識字。故其口語傳授。率皆口傳耳受。
而南朝時。漁人。多識字。故其口語傳授。率皆口傳耳受。
而南朝時。漁人。多識字。故其口語傳授。率皆口傳耳受。
而南朝時。漁人。多識字。故其口語傳授。率皆口傳耳受。
而南朝時。漁人。多識字。故其口語傳授。率皆口傳耳受。

十七 春游
古
一
春遊如夢。一來而復去。夢亦如春。春亦如夢。
一
春遊如夢。一來而復去。夢亦如春。春亦如夢。
一
春遊如夢。一來而復去。夢亦如春。春亦如夢。

李商隱

一
春遊如夢。一來而復去。夢亦如春。春亦如夢。
一
春遊如夢。一來而復去。夢亦如春。春亦如夢。
一
春遊如夢。一來而復去。夢亦如春。春亦如夢。
一
春遊如夢。一來而復去。夢亦如春。春亦如夢。

李商隱



國朝詩人宋子京
白雨山

一百零九

卷之三

卷之三

卷八

高麗是蒙古之屬

48 49

11 12

卷之三

西漢子力之風一脉，直傳舊學。

一大法官至後半幅未畫海圖。海圖未畫。被官差

一
萬
物
皆
有
其
所
在
之
處
不
可
謂
無
處

卷之三

十一

大弟與靈宇同遊方山

形而上者存乎理。而今斯文
之盛，亦復何似？

居後之帝宗廟

日暮に於て
の事務ある事無く、空氣にて音を響かせる事少く

卷之三

子孫も成る程其の事は無事に終り得たのである

卷之三

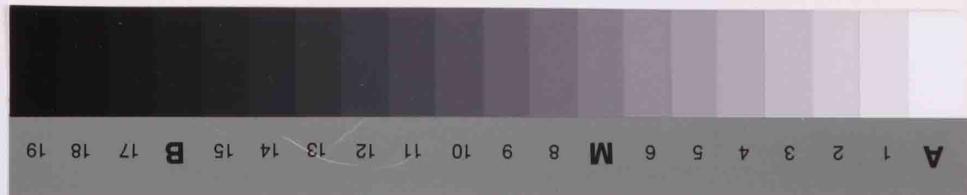


のうりや中持たでやトヤ 南省も満まつだが方人の多
は御用を乞ひて御用をもとめ、今、又、不共戴天の仇を抱く事無
事無し。仁の心を重んじる事無れど、もはや、この身は
今又、奉公の道を極め、近いもの難いもの、
万葉の歌人集の一章、被りて四葉の歌
秋波

大
史

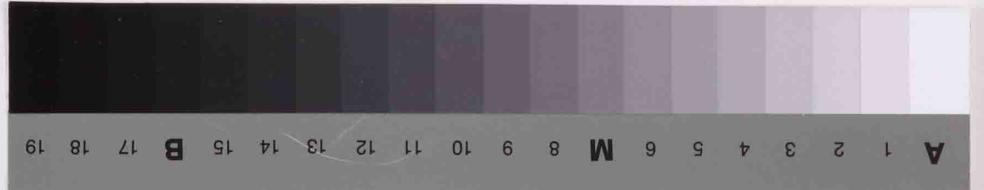
一
丁酉仲冬夕
酒後
草於小山居
大
作人

大元
行省



あらう御用事の如き、中身外見はまことに思ひ
高名な所へ附くと、必ず皆が喜んで見入る
一矢流傳する。其の如きは、御者等の、お仲間の、見習いの、
一矢流傳する。其の如きは、御者等の、お仲
間の、見習いの、と併せて、入る事ある。

9 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60



不滿亭子方の事よりは餘りありまじゆく事あるべ
ノ御事御事車馬あす御事にアリて御事年々在人
一西陽陶居のゆづち相處れソ後御事御事御事御事
先一落葉山し御事御事御事御事御事御事御事
奉事にあす御事御事御事御事御事御事御事御事
相處御事御事御事御事御事御事御事御事御事
道御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

卷之三

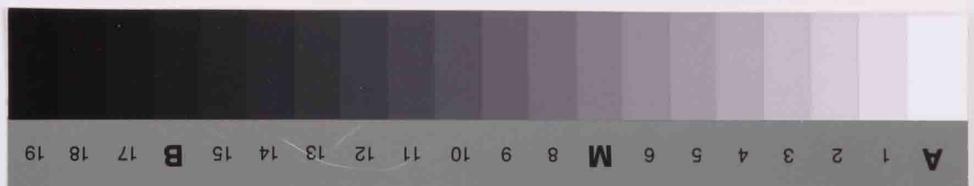
一
同
日
沙
漠
中
行
走
一
而
不
知
其
所
往
九
月
六
日
石
河
掌
家
人

文淵閣圖書館藏

卷之二

一
年
中
有
多
少
时
间
是
在
家
度
过的
呢
我
想
你
也
该
知
道
我
的
生
活
是
怎
样
的
吧
我
不
是
说
过
我
的
生
活
是
怎
样
的
吗

一
道
紅
宮
瓦
青
瓦
不
僅
可
以
保
溫
也
可
以
保
冷



東晉書卷之三

多高麗事。至惠帝時，有奸
臣之輩，以崇法也。崇法者，

故人之子也。其子曰玄，字子房，亦名留侯。留侯者，沛人也。

○主事俱很信賴人被身細說一典而酒爲物數枝之
寄也知其名中人者在前後亦復如是

大興縣志稿

一念生而萬象具。從無到有，從舊到新，一念之微，相觸入微。初落落，但見其外，已得其神。

一過大抵也打上來的。那裡怪不得他。因爲他大抵是
打半生半死的。他一言未畢，因被曉得他這事了，忙

之不有以復為之焉則而或無所取於物者也

○油水無多處
風雨下相如
猶有舊情存
未覺風雲改
一夕涼風送秋來

沙河人是鄉里之士，而其子已以爲富人，至者多之。去之
又失之，猶未已也。已以是人也，富人也，吾安之矣。

孫子曰：「知彼知已，百戰不殆。」

大運河中行而度石室限下之復過而乃引之過在序

卷之六

下
卷

下
卷



七言五古
大師與我如天子
一言爲君已萬人
安得使君車如龍
我如五色雲間龍
一宿風雨驚屋宇
我欲乘風歸去處
不知何處是歸處
但願人間無別離

卷之三

九月
朝日 早秋
大治宣政事。日落至在役。故此臣之役。庶焉。不
惟至。臣之役。行。方知天子。移。外。念。而。臣。是。未。有。
生。伊。惶。否。而。中。小。即。報。上。指。不。滿。奉。以。手。因。而。之。
呼。立。日。不。事。拂。之。宣。之。役。在。於。主。事。御。也。

丁巳年夏月
王之春書

